

令和 8 年度 さいたま市 英語教育改善プラン

目標

独自の英語教育「グローバル・スタディ」をさらに推進し、言語活動を通して、英語で積極的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す。

☒ 言語活動
 ☐ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☒ ALTの参画
 ☐ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ① 小学校 6 年生全員が実施している英検 ESG において、リスニング・リーディングともにスコアが上昇した。
(R6:総合平均スコア 450⇒R7:総合平均スコア 454)
- ② 言語活動の時間を十分に確保し、言語活動を通して語彙や表現を身に付けさせる授業が増えた。

未だ改善が必要な点

- ① R7「さいたま市学習状況調査」の質問事項『「グローバル・スタディ」の勉強は好きですか』の低学年の肯定的な回答が減少傾向であった (R6:83.0%⇒R7:81.9%)
- ② 「小学校教員の新規採用者に占める一定の英語力を有する者の割合」が目標 (50%) に達していない。

2. 要因分析

- ① グローバル・スタディ科専科教員や授業の指導補助に当たっているグローバル・スタディ科非常勤講師、ALTに向けた研修会で、実践的な指導方法の研修をしたことで、指導力向上につながったと考えられる。
- ② 学校訪問を行い、言語活動の指導について、研究協議会等の中で、具体的な指導助言を行ったことより、授業改善が図られたと考えられる。

- ① 全学年でみても、肯定的な回答が 1 ポイント下がり、英語に苦手意識をもつ児童が自信をもって取り組めるような主体的な学びが十分に展開されていないことが要因であると考えられる。
- ② 一定の英語力を有する志望者は、小学校英語教育推進特別選考 (専科教員) に流れてしまうため、一般の小学校教員の新規採用者での割合は低い。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ① 1 2 年間の学びの連続性の構築
小・中学校の「グローバル・スタディ」カリキュラムを改訂し、これまで以上に、小・中の円滑なカリキュラム接続に重点を置いている。そこで、カリキュラム改訂のポイントや言語活動を通じた指導等について、小・中合同のグローバル・スタディ科主任研修会や学校訪問で、指導助言する。
- ② 教員等の指導力向上
「グローバル・スタディ」の指導を行っている教員を対象とした研修を引き続き実施するだけでなく、新規の専科教員や非常勤、ALTを個別に訪問し、授業を参観した上で指導助言を行うことで、「グローバル・スタディ」の指導に係るすべての教職員の指導力を高める。

- ① 個別最適な学びと協働的な学びの一層の充実
個別の目標設定や学習方法等、単元ゴールを達成するために必要な学習を児童が選択して取り組み、互いに共有し合う学びを一層充実させる。そのために、グローバル・スタディ科の推進力となっている専科教員の研修会を授業公開形式で行い、実際の授業をもとにしての協議会や指導を通して、専科教員全体の授業力の向上を図り、英語が好きで、積極的にコミュニケーションを図る児童の育成を目指す。
- ② 教員採用試験での加点制度の実施
英語力を有する受験者の加点制度を引き続き実施し、小学校教員の新規採用者に占める一定の英語力を有する者の割合の向上を図る。さらに、市教育研究会の参加を通して、小学校教員の英語力を高めていく。

令和 8 年度 さいたま市 英語教育改善プラン

本市独自の英語教育「グローバル・スタディ」の更なる充実を図り、言語活動を通して、英語で積極的にコミュニケーションを図ることができる生徒の育成。

目標 ○ CEFR A1レベル相当の英語力を有する生徒の割合（R7：88.9%⇒R8：90.0%）

☒ 言語活動
 ☐ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☐ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他
（パフォーマンステスト含む） （AIを除く）

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

①中学2年生を対象とした英語効果測定で、4技能のうち、リーディングにおいて前年度の本市の結果と比較して、5.3ポイント増加した。

②R7 英語教育実施状況調査の英語担当教師の英語力に関する項目で、CEFR B2レベル相当以上を取得している教師数の割合0.9ポイント上昇し、64.8%となった。

①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が令和6年度と比べて、0.3ポイント下がった。
(R6:89.2%⇒R7:88.9%)

②中学2年生を対象とした英語効果測定で、4技能のうち、ライティングにおいて平均点は高かったが、高得点層と低得点層の二極化が顕著であった。

2. 要因分析

①英語教育ワーキング・グループを設置し、カリキュラムの検証や改訂を行い、小・中9年間の系統性をもった質の高い授業が展開できる環境を提供している。

②学校訪問や研修会等で、学校訪問を行い、具体的な指導助言を行ったことより、英語で授業を進めるという指導改善が進み、教師の英語力の向上が図られたと考えられる。

①目的や場面、状況設定した上での言語活動の設定により、やり取りが十分行える授業が増えてきたが、教員や学年によって差がみられる。

②小学校から中学校への円滑な接続に課題を感じており、小中9年間を一貫した指導をどのように行ったらよいのか見通しをもてないまま、指導に当たっている教員がいることが研修会や学校訪問等で見受けられた。

3. 目標を達成するための施策・事業

①市独自のカリキュラムの改訂による質の高い授業の推進

カリキュラムに目的や場面・状況を明確にした言語活動を設定し、単元の指導計画例を示している。そのカリキュラムをもとに各学校で生徒の実態に応じてアレンジし、授業を実践することで、さらに活発に生徒の言語活動が行われるようにする。

②生徒の英語力向上を促進するための教員の英語力向上

英語力向上のための研修の機会を活用し、周知・受講奨励を行い、教員の英語力向上を支援し、授業改善につなげることで、生徒の英語力向上を目指す。

①エビデンスを基にした研修会の実施

生徒の学習成果を可視化・分析する効果測定を引き続き実施し、エビデンスを基にした研修会を通して、指導法の改善を推進する。さらに、個々の生徒の状況を正確に把握した上で、生徒が英語を使う必要感をもって自分の考えや気持ちを伝え合う活動を行うようにする。

②本市独自の英語教育「グローバル・スタディ」の充実

小・中連携を見通した指導ができるよう、小学校と中学校の教員合同の研修会を実施する。小グループでのデモレッスンをを行い、それぞれの校種の指導内容を深く理解し、小・中9年間を一貫した教育課程の強みとよさをさらに生かす。

（参考URL：[さいたま市／さいたま市の英語教育“グローバル・スタディ”](#)）

令和 8 年度 さいたま市 英語教育改善プラン

指導と評価の一体化を軸とした豊富な言語活動を取り入れた授業による生徒の英語力の育成。

○CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合を、100%にする。(R7: 90.2% ⇒ R8: 100%)

○卒業段階でCEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合を、80%にする。(R7: 77.6% ⇒ R8: 80%)

目標

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☐ 教師の英語力・指導力 ☐ 校種間連携 ☐ ALTの参画 ☐ ICTの活用 ☐ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ①生徒の英語力において、CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合の改善が見られる。
(R6:64.5%⇒R7:77.6%)
- ②英語担当教員の授業における英語使用状況において、50%以上を英語で行っている授業の割合の改善が見られる。
(R6:20%⇒R7:80%)

- ①生徒の英語力において、CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合の低下が見られる。
(R6:100%⇒R7:90.2%)
- ②生徒の英語による言語活動において、単元計画に基づかない取り組み方が多く見られる。
(参考：R6:83%)

2. 要因分析

- ①グローバル・スタディを実施しているさいたま市立小・中学校から入学してくる生徒が約半数、在学中にも大学進学を視野に入れている学生が多いことから、例年高い水準を維持しているものと考えられる。
- ②指導主事による指導訪問とフィードバックを全教員実施したことで、授業中の英語使用に対する教員の意識が改善したと考えられる。
- ①CAN-DOリストやルーブリックを用いた単元ごとのパフォーマンステストの実施率が低いことから、A2レベル相当やそれ以上を目標にした単元計画と授業実践ができていないことが原因と考えられる。
- ②単元計画によって目的場面状況の設定がされていないことが原因と考えられる。また、3年生に近づくにつれて大学入試演習等の授業が増え、言語活動の量が減少していると考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①市立高等中等教育学校英語教員による市立中学校グローバル・スタディ授業参観の実施
市立高等・中等教育学校英語教員による市立中学校のグローバル・スタディ授業参観を実施し、「12年間の学びの連続性」及び中高の連携を意識した高等学校英語の授業改善を図る。
- ②①指導訪問・要請訪問の実施
全校指導訪問を実施し、4技能のパフォーマンステストを含む単元計画や、指導と評価の一体化を軸とした授業計画などについて、指導・助言する。目的、場面、相手の設定がある言語活動を取り入れて、単元計画をするよう指導・助言する。要請があれば授業参観＆フィードバックなどの個別の指導をする。
- ②英語科教員向け研修・ワークショップの周知及び開催
外部の教員向け研修案内を周知し、積極的な受講を促す。また、各校英語科主任等へのヒアリングを実施し、学校が求める研修やワークショップの実施を計画する。

さいたま市教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		100	97.5	98	100	100	90.2	100		100	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		82.5	52.5	54	64.5	65	77.6	80		80	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		100	78.6	100	83	85		90		95	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		100	35.7	100	30	40		45		50	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	80	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	100	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		100	97.8	100	98	100	94.2	100		100	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		100	78.6	100	20	50	80	80		80	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		89	88.4	89.5	89.2	90	88.9	90		90	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		100	100	100		100		100		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		100	100	100		100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	100	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	100	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		80	56.3	80	63.9	80	64.8	80		80	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		100	100	100		100		100		100	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	100	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	100	100		100		100		100	